

のような非現実的理念を憲法として持つことになった日本国民はその突然変異の奇蹟を幸運として、日本の誇りとして自覚すべきだということになります。

この指摘が暗に批判しているのは、九条を削除して日本を戦争もする「普通の国」にしようとする保守派だけではなく、とにかく平和は絶対善であり、正義なのだから九条を守れと唱えてきた進歩的左派でもあるのです。日本の左派は九条がもつ非現実性



と理念性の矛盾に無自覚であって、問題を善と悪との対立として単純化してきたというのです。このあたりの理論的説明には中沢の宗教人類学的知見がかなり援用されていますが、興味深いのは対談の始まりで宮沢賢治が取り上げられていることです。

「あれほど動物や自然を愛し、命の大切さを語っていた賢治が、なぜ田中智学や石原莞爾のような日蓮主義者たちの思想に傾倒し」結果的に戦争肯定イデオロギーに加担することになったのかと問われています。太田と中沢の答えは、正義への情熱や愛の感情によって人間は容易に人を傷つけるようになり、

戦争へと進んでゆくというものです。賢治は単に誤りを犯したのではなく、彼の愛の感情のゆえに政治活動へと入って行ってしまったということです。したがって正義や愛が暴力と戦争につながる危険性を戦後のわれわれも共有していることを自覚すべきである、戦前の軍国主義を「悪の思想」として切捨て、戦後の平和主義に安住すべきではないということになります。

ではこのような考えによって憲法九条の意義はどうなるのでしょうか。非現実的な理想である憲法九条はその非現実性のゆえにこそ価値があるのです。歴史は、正義のために、愛のために行われた戦争で満ちています。何らかの事情で北朝鮮のミサイルが日本に着弾したら、昨日まで平和を語っていた日本人も一夜のうちに愛と正義のために戦争に賛成するでしょう。それが人間の本性です。しかしこの人間の本性に、愛が憎悪となり、正義が不正義となる矛盾を気づかせる棘が平和という非現実的な理念なのです。そして人間に自らの矛盾を気づかせる棘を憲法九条としてわれわれ日本人が持っていることの奇蹟と幸福をわれわれはもっと誇るべきだということになります。このことをお笑い芸人である太田は、「無茶な憲法だといわれるけれど、無茶なところへ進んでいくほうが、面白いんです」と表現しています。憲法九条とは「人間の限界を超える挑戦」として人類史上に出現した奇蹟なのです。だからこそそれは「世界遺産」に値するわけです。

本書にはこの他にも憲法問題に関して斬新な発想が含まれています。それらに賛同するか否かは別にして、本書はわれわれが憲法九条の価値について考え直し、議論し、そうすることで九条を生かしてゆくきっかけを与えてくれそうです。

「名古屋市立大学・憲法九条を考える会」申し合わせ

(名称) 本会は、「名古屋市立大学・憲法九条を考える会」と称する。通称を、「名市大九条の会」とする。

(目的) 「九条の会」のよびかけに賛同して、憲法九条の現代的意義を理解し、それを積極的に生かしていくための活動を行う。

(会員) 本会は、個人会員によって構成される。名古屋市立大学の教員、職員、院生、学生及び関係者で、本会の趣旨に賛同する個人は会員となることが出来る。

(活動) 学習会、講演会、ビデオ上映等を行う。その他の具体的活動については、世話人会で検討する。

(組織) 本会の活動を円滑に進めるために世話人と代表をおく。世話人会のもとに事務局をおく。

(財政) 本会の財政は、入会金(教職員1口1,000円、学生1口300円)と募金でまかなう。

日本国憲法 第二章 戦争の放棄 第九条

- ① 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- ② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。